



「武蔵三芳野名勝図会」(中島千代子氏蔵)

川越学事始め—郷土史の系譜を追う

川越市立博物館の第8回企画展は「川越学」という言葉をタイトルに掲げ、展示を構成してみました。「川越学」とは聞き慣れない言葉ですが、最近では「江戸東京学」とか「多摩学」というように使われており、決して珍しい言葉ではありません。今回の展示は「川越学事始め」とあるように、川越地方の多彩な郷土史研究をもう一度振り返り、その蓄積を再評価して、今後の郷土史研究の方向性を探るということにありました。

展示では、「川越学」という学問は成立するのか、成立するとすればその方法や内容はどのよう

なものか、といったことには触れることができませんでした。これは川越市立博物館が「川越学」の方法と内容を模索している段階であるというだけでなく、さまざまな分野の研究の活性化とその蓄積が前提と考えているからです。ここでは「川越学」の方向性を展望することに止めたいと思います。

川越学への期待

東京都の三多摩地域では、新しい地域科学の創造ということで「多摩学」を提唱しています。東京経済大学多摩学研究会が編纂した『多摩学のす

すめI』(けやき出版)では、その方向性を次のように述べています。「一つの『地域』という共通項を媒介に、政治・法律・経済・地質・動植物・歴史・経営……のあらゆる分野の研究を動員して、共同総合させ、その地域に住む民衆の意識や心性をトータルに究明していこうというのである」(柴田徳衛氏)「地域社会の総合的研究を、多摩地域を対象として推進し、その成果を教育の素材とする。これによって市民として地域社会の問題を科学的に考察する教養をつけることを目的にする」(あとがき)この考え方は「川越学」を提起する時のベースになっています。

今回使用した「川越学」も、やはり川越地方をフィールドにした総合的な郷土史研究、あるいは郷土の個人や機関が協力して行う学問諸分野の地域における総合と考えることができます。「川越学」の実現は今後の実践にかかっていますが、この企画展がその第一歩になれば幸いです。

さて、今回の企画展では「川越学」実現にむけて、川越地方の郷土史の系譜をたどってみることに主眼を置きました。各地の民族集団では自民族の来歴の時間的認識から歴史的知識が得られ、生活圏内の空間的認識から地理的知識がもたらされ、やがてそれらが記述、編纂されるといいます。川越地方では、地域住民による地域社会の叙述はいつ頃から始められたのでしょうか。

江戸時代の地誌

地域社会の歴史的・地理的知識を記述するものでは、地誌という形式が古くから存在していました。奈良時代に編纂された風土記はその代表的なものです。地域住民が編纂するというものではなく、やはり国を統治するための民生資料という性格を強くもっていました。江戸時代になると地誌の編纂が活発に行われるようになり、公撰・私撰を問わず全国各地で様々な地誌類が著されました。これらの中には民間人の手になる案内型の地誌が含まれています。案内型の地誌とは、地域の神社・仏閣・名所・旧跡・景勝などの由来・来歴を記した手引き書としての地誌で、実用性と利便性を兼ね備えています。この案内型の地誌も当初

は文芸的色彩の濃いものでしたが、享保17年(1732)に『江戸砂子温故名跡志』が出てからは、本来の地誌的・地理的傾向を強め、近世地誌の形式を確立するようになりました。

川越地方でも案内型の地誌があらわれてくるのは江戸時代中期以降です。しかし天文6年(1537)成立の『河越記』は、戦国時代の戦記物として川越城をめぐる情勢を記していますが、その後段は文学的表現で川越城周辺の名所や社寺などを記述しています。作者の西脇は川越城周辺に住んでいた僧侶と考えられており、川越地方地誌の先駆的なものといえます。江戸時代中期になると多くの地誌が作られるようになります。代表的な川越の地誌をあげると次のようになります。

『川越索麴』(寛延2年〔1749〕以前成稿)

『多濃武の雁』(宝暦3年〔1753〕稿)

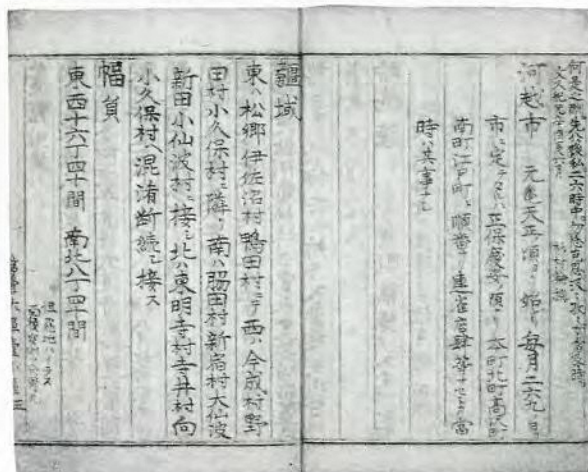
『川越年代記』(天明元年〔1781〕頃刊)

『武蔵三芳野名勝図会』(享和元年〔1801〕稿)

これらの著者はすべて川越の住人であり、地域住民によって書かれた地域社会の記述ということになります。その階層をみると『川越索麴』、『多濃武の雁』、『川越年代記』などの古い年代の地誌は武士や僧侶であるのに対し、川越地方地誌の集大成といわれる『武蔵三芳野名勝図会』は鍛冶町の町人中島孝昌の手になるものでした。当時の川越の文化状況の変遷をみる上で興味深いことといえます。

明治時代の地誌と郷土誌

江戸時代は民間の手になる地誌が数多く生み出



『川越町地誌』(明治9年)川越市立図書館蔵



「古谷村地誌」(明治19年)川越市立図書館蔵

されましたが、明治時代には行政や学校の教師による地誌編纂が増えてきます。明治政府は成立当初から国史編纂と並んで地誌編纂事業にも取り組みました。明治5年(1872)より開始された「皇国地誌」の編纂では、各府県に地誌担当者を置き、村誌・郡誌を作成し提出する方法をとったため、全国の町村で地誌の編纂が行われました。

一方、各地の尋常小学校では明治40年代に郷土科教授の一貫として、「郷土誌」の編纂を始めています。この時の「郷土誌」は市内の小学校などに保存されていますが、川越小学校に残されている『郷土誌』(明治44年に川越北尋常小学校編纂)では編纂の目的を次のように記しています。

- 1、川越町自治発展ノ参考ニ備フルコト
- 2、教育上須要ナル郷土科教授細目ノ材料ヲ此处ニ得ントスルコト
- 3、本誌ヲ基トシテ増補改削ヲ加ヘ他日完全ナル郷土誌ヲ得ントスルコト

ここには当時の「郷土誌」編纂の意図が端的に表現されています。それはこの「郷土誌」編纂が郷土科教育の教材の提供よりも、自治発展の参考資料とすることを目的の第一にあげていることです。

当時の日本は急激な近代化政策のため、特に明治中期以降の産業革命の進行により農村の疲弊は深刻になっていましたし、日露戦争の膨大な戦時出費は地方自治体に過大な負担としてのしかかっていました。この時期に取り組みされたのが、農村の立て直しと地方自治の振興をはかる地方改良運動でした。地方改良運動では学校に大きな期待を



「郷土誌」(明治45年頃)川越市立図書館蔵

寄せていました。児童の体験の場である郷土を学習の中心におく郷土教育に、愛郷心の高揚が要請されたのです。

郷土史の時代

各地の尋常小学校などで「郷土誌」の編纂が取り組まれた時期は、全国的に郡誌や県誌類の編纂が流行し始めた時でもありました。また柳田国男によって『郷土研究』という雑誌も創刊され(大正2年[1913])、人々が郷土へ大いなる関心を寄せた時期でした。これ以後、郷土の歴史研究を郷土史と呼ぶことが多くなります。郷土史の背景には、当時進行していた都市と農村の格差拡大や農山村の疲弊に対する一種の地方復権情熱があったと指摘されています。川越地方の郷土史研究を推し進めた安部立郎も、その思想と行動の中核に「愛郷的精神」というものがありました。このような情熱は郷土史に郷土人の自己主張を内包させるものですが、全国的にみると偏狭なお国自慢や独善的解釈を生み出す結果にもなりました。戦後になって郷土史の負の側面は否定され、「地方史」という言葉が郷土史に変わって使用されるようになりました。これは単なる名称の変更だけではなく、当然歴史観の転換を含むものです。しかし、郷土史も地方史も一定地域の歴史研究という側面に違いはなく、地域の具体的事実や細部を問題にするのは当然です。これからの地域研究としての郷土史は、そうした具体的事実をより豊富化し、新たな体系にまとめ上げることが課題となります。(学芸係 大野政己)

『武総将棋手相鑑』と川越（下）

(4)「仙波 原 傳三」って、どんな人？

原 傳三は、嘉永5年（1852）5月17日、武蔵国北足立郡桶川宿 栗原伝左衛門の長男として生まれ、その後入郡大仙波村 原 与惣治の養子となりました。原家は甲斐国（山梨県）の武田家の家臣であった原 隼人の流れをくむと言われる名家で、武田家滅亡後に大仙波村へ土着・帰農したと伝えられており、江戸時代後期には入間川三十六ヶ村の頭取名主も勤めました。

傳三の事蹟である程度知られているのは、仙波河岸の開設・運営に尽力したことです。元来、仙波河岸の開設は養父である原 与惣治が弘化3年（1846）に川越町の町年寄たちと連名で川越藩に河岸開設の嘆願書を提出したことがきっかけになっています。その理由として当時川越五河岸の船問屋たちと運賃をめぐる紛争があったこと、新河岸・川越間の陸上交通の難所であった烏頭坂を越えずに荷物を運ぶことができること、をあげています。

川越藩はこの嘆願書に対し、最終的に認可を与えましたが、実際に河岸場が開設されるまでにはなお紆余曲折があったらしく、明治2年（1869）に傳三の出資で大仙波愛宕神社下の湧水や水路等を新河岸川とつなげて河岸場が作られました。この時に川越町の有力商人では綾部利右衛門、沼田治兵衛、染谷平六、吉田関太郎らが参画しています。

その後、仙波河岸は川越町に最も近い河岸場として繁栄しましたが、傳三は明治14年～15年ころ（1881～82）に船問屋の経営権を投資者の一人綾部利右衛門に譲り渡しています。その理由ははっきりしていませんが、この時に、船問屋に勤めていた番頭はそのまま利右衛門の船問屋の使用人になったという話が残っています。

また、日常の暮らしぶりもいかにも名家の当主らしく、大勢の奉公人が広大な農地を耕作していたとか、吉原を三日三晩借り切って豪遊したとか、現在の私たちの生活からは想像できないような話

も残っています。

以上のことから、傳三は趣味だけでなく社交上の嗜みの一つとして、当時明治維新の影響で家元が幕府の禄を失ったことに代表されるように、経済的に困窮していた将棋界に対してパトロン的な立場をとったことから『番付』にその名前が載せられたと想像することもできます。

このように、幕末～明治期の新河岸川舟運の発展に大きな足跡を残すとともに、その後明治33年（1900）頃には仙波村の村長まで勤めた（仙波小学校蔵「仙波尋常小学校棟札」による）傳三も明治40年（1907）3月13日（戸籍による、墓誌では16日）に57歳で永眠しました。

(5)その後の原家について

傳三の子供には7男2女がありましたが、その後直系の子孫は絶えてしまったらしく住居と墓地のみが親族に引き継がれました。現在では住居は取り壊され、その跡には建売住宅が立ち並んでおり当時の様子を偲ぶことのできるものは一族の墓が並ぶ墓地のみとなっています。（写真2・3）

また、傳三が開設にその力を尽くした仙波河岸も、その後の東上鉄道の開通や河川改修による舟運の衰退により、現在ではその繁栄の跡を伺うことは難しくなっています。（写真4）



写真2 原 傳三邸跡の現況（仙波町3）

(6)おわりに

今回は、偶然に見つけた一枚の番附から、川越に係わるある一人の人物を追いかけてみましたが、

残念ながら新たな資料を掘り起こすことはできませんでした。

しかし、明治時代初めまでの将棋界においては、一時代を築いた名人たちですらその経歴が現在まで知られている人がほとんどいないということを考えると、こうして地元に残すことのできた傳三はまだ幸せな方なのかもしれません。



写真3 原 傳三の墓碑（仙波町3）

今後も、〔表2〕に名前の載った川越ゆかりの『手相鑑』の人々の事蹟について、将棋に関係したことに限らず可能な限り追いかけてみたいと思います。

最後に、この文章をお読みになった方々の中で、これらの人々に関する情報を知っている、もしくは自分の先祖で関係する資料を持っているという方がいらしたらぜひ御一報いただきたくお願いしながらこの項を終わりとします。



写真4 荒廃した仙波河岸のようす（昭和10年頃〔武州・川越舟運〕より）

〔表2〕『武総将棋手相鑑』の川越ゆかりの人々

位置	段位	居住地	氏名	位置	段位	居住地	氏名
東2段目	初段	川越	関口善吉	西4段目	初段	川越	岡野梅吉
〃	〃	〃	石川源吾	〃	〃	〃	山崎初太郎
西3段目	〃	〃	松本代吉	〃	〃	〃	國田福松
〃	〃	〃	岸治三郎	〃	〃	〃	岡田初太郎
西4段目	〃	〃	川田春吉	〃	〃	〃	今井利兵衛
〃	〃	〃	西川光之助	客座東上段	〃	仙波	原傳三
〃	〃	〃	藤本京助	行司2段目	2段	川越	牧野與兵衛
〃	〃	〃	津ヶ原善次郎				

参考資料

齊藤 貞夫 『川越舟運—江戸と小江戸を結んで三百年』	さきたま出版会
同上 『武州・川越舟運〔新河岸川の今と昔〕』	同上
『川越市史資料第5集 川越市の政治と生活の聞き書』	川越市史編纂室
『川越市史資料第6集 明治から大正へ聞き書I』	同上
大竹 延 『将棋歳時記』	創樹社

協力機関・協力者（順不同、敬称略）

日本将棋連盟関西支部	木村 義徳（将棋博物館館長）	清水 孝晏（船橋市）
原 隼人（仙波町3）	原 武雄（仙波町3）	

（前教育普及係 鹿倉 航）

板碑の立つ前方後円墳

～牛塚中世墳墓跡について～

1. はじめに

古代の豪族たちのお墓である古墳を発掘していると、思いがけず墳丘上から中世のお墓が発見されることがあります。「古墳の上になぜ中世のお墓が作られるのだろうか？」調査に当たった考古学者たちが常々頭を悩ませるところです。

市内の場にある前方後円墳、牛塚古墳は金銅製指輪、銀装刀子、金銅張馬具などきらびやかな副葬品を出土した古墳として有名です。昭和40・41年に行われたこの古墳の発掘調査でも墳頂部と墳丘テラス部から中世墓が検出されています。

本稿では、牛塚古墳で発見された中世墓の紹介を中心に、古墳上に墓を営んだ中世の人々の意図を探ってみたいと思います。

2. 牛塚古墳の中世墓

牛塚古墳では後円部墳頂と墳丘テラス部に中世墓の存在が確認されています（第2図）。

墳頂部で発見されたのは、集石墓と呼ばれるタ

イプのお墓です。小石を方形に敷き並べ、中心には在地産の甕を埋納していました（写真1）。甕の周辺からは細かく砕けた火葬骨が検出されており、この甕は火葬骨を納める蔵骨器として用いられたものと考えられます。また、墓の南端からは板碑1基が出土しました。おそらく、死者の菩提を弔うため建てられたものでしょう。

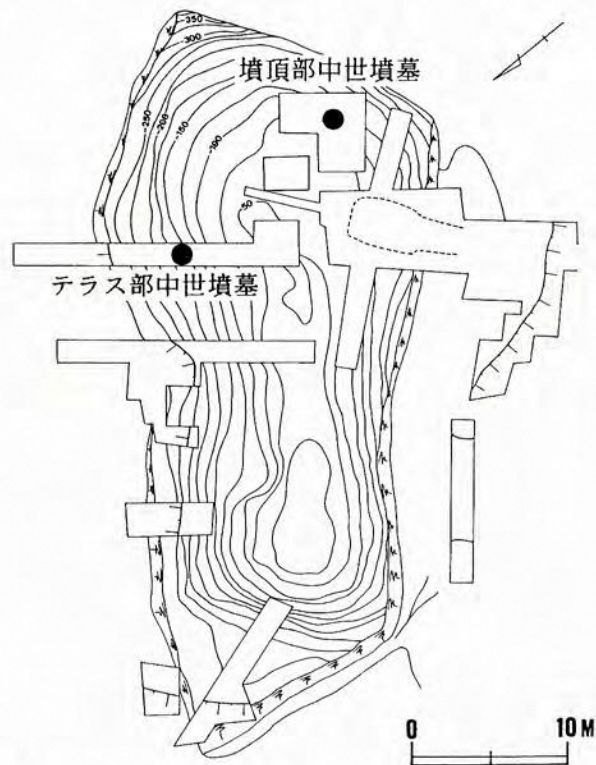
テラス部では、小石を円形に配した3基の集石墓が発見されました。それぞれの墓から元応2年（1320）と延文元年（1356）、応永年間（1394～1428）、応永16年（1409）と30年（1423）の板碑が出土しています。このうち応永年間の板碑を出土した墓の下からは火葬骨の破片と炭化木材の破片がまとまって検出されました。火葬骨を曲物や木箱などに納めて埋葬したものと思われます。

3. 墓の年代と構築順序

牛塚古墳の中世墓には、多くの人々が連綿と葬られていました。これらの墓はいつごろからどんな順序で作られていったのでしょうか。



第1図 牛塚中世墳墓跡と周辺の中世遺跡



第2図 牛塚古墳上の中世墓



写真1 墳頂部の集石墓

墳頂部の墓の年代を知る手掛かりは蔵骨器の甕の製作年代です(第3図)。この甕は14世紀前半に在地の工人たちにより焼かれた製品です。墓もこれとほぼ同時代に作られたものと考えられます。

テラス部の墓からは14世紀前半から15世紀前半の板碑が出土しています。これらを死者を埋葬する時に建てられた墓標と考えるならば、テラス部の墓は墳頂部より後に作られたことになります。

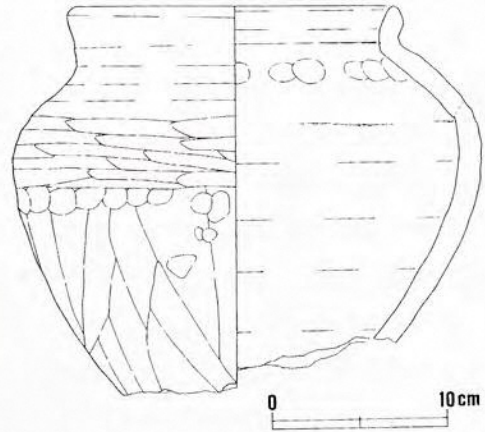
近年の研究によって14世紀後半から集石墓は方形から円形に、蔵骨器は陶磁器から曲物・木箱に移り変わることが明らかになっています。牛塚古墳の中世墓も同様の変遷を辿るものと思われる。

これらのことから、牛塚古墳ではまず後円部の墳頂に墓が築かれ、これを核として墓所が形づくられてゆく様子をうかがうことができます。

4. 古墳と中世墓

古墳の上に作られた中世墓は市内豊田本の南大塚古墳群でも発見されています。ここではもともとあった古墳の上に墓を作るばかりでなく、古墳群の中に新たに河原石を積んだ塚を築き、墓を営んでいました。これらの墓はいずれも陶磁器の蔵骨器を用いていないことから、14世紀後半ごろに築造されたものと考えられます。

周辺地域では大里郡花園町の小前田古墳群で古墳の墳丘から14世紀前半の在産産甕を用いた蔵骨器が出土しているのが注目されます。また、大里郡川本町の鹿島古墳群では古墳群内の塚の上に板碑を建て、中世墓が作られていました。ここでは蔵骨器は出土しておらず、14世紀後半ごろの墓と



第3図 墳頂部出土の蔵骨器

考えられます。

このように、古墳の上や古墳の近くに墓所を営む行為は、14世紀前半ごろから盛んになり、川越周辺に限らず北武蔵の多くの地域で行われていたものと思われます。また、こうした地域の多くは中世武士たちの本貫地と重なり合います。

5. 祖霊の地としての古墳

古墳の上に墓が盛んに作られ始めた14世紀前半は、鎌倉幕府が滅亡し旧来の御家人たちが再編成されてゆく激動の時代です。地方でも、武士たちの所領に様々な変化が起きました。こうした中で彼らは古代の豪族たちの墓である古墳上に墓を営み遠い祖先たちと擬制的に縁を結ぶことによって自らの土地の領有の正当性を主張したのでしょう。想像をたくましくするならば、牛塚古墳のように最も目立つ後円部の墳頂に板碑を建て墓所を営むものは、土地争論の際、地境を示すランドマークとして用いられたかもしれません。

牛塚古墳のある市内的場は中世には河越荘に属しています。古墳の西方には鎌倉街道との伝承をもつ古道が南北に伸び(第1図)、この道沿いには河越館(★)や堂山中世墳墓跡(B)など河越氏と縁の深い遺跡が並びます。こうした地理的・歴史的な環境の中で牛塚古墳上の中世墓に葬られたのが具体的にどんな人々だったのか、興味は尽きません。今後の調査の課題としたいと思います。

本稿の執筆に当たり、牛塚古墳の調査を担当された小泉功先生には種々のご教示をいただきました。心より感謝いたします。(学芸係 岡田賢治)

** 職人コーナーの展示 **

建 具 職

建具とは部屋を区切るための戸や障子をいいます。建具職は江戸時代になって成立した職業で、建具師、建具屋、戸障子師などと呼ばれていました。建具職人が作るものは障子が一番多く、その他には襖の枠や欄間、仏壇なども手掛けました。障子の製作には次のような工程をとっています。
 ①ひのきや杉の丸太を製材する。②半年から1年半、天日乾燥をする。③用途に応じて木取りをする。④部材を削って仕上げる。⑤組む所や棧の入る所を加工する。⑥仮組みをして仕上げ、砥の粉を塗る。⑦米でねった糊を付けて組み込む。⑧建物の中に取り付ける。



建具職の展示

資料寄贈者名簿

敬称略 順不同

平成5年度	川越市立磯小学校	尾崎 好孝	繁田 光雄	尾崎 勝美	船津 的美	田中 耕一
	大河内一人	川越市立第一小学校	飯野 まさ	吉川 啓介		
平成6年度	風間 昌司	川村太郎	坂本 俊雄	岸田 長久	川越市文化財保護課	川越市中央公民館
	間仁田貞雄	一戸 嘉子	関根 義蔵	西川 貞助	福島 安雄	須田 悦男
	水村 幸雄	高橋 敏朗	佐藤 辰夫	荒幡 邦秀	篠崎 清吉	本橋 弥彦
	沼田 カツ	中島 淳	加藤 熙	勢ノ 清次	鈴木 昭治	大室 丈夫
	山田 勝利	金子 光一	加治 久明	塩野源太郎	金子施恵子	岡田 忠久
	野尻 豊一	塚田 清一	長沢 武司	角田 竹士	大塚 敬三	峯岸 利夫

資料をご寄贈いただき厚く御礼申し上げます。今後、ご寄贈いただいた方は次号以降でご紹介します。

ご寄贈いただいた資料は、今後「収蔵品展」等でご紹介させていただきます。

利用状況

(単位：人)

月	一 般			団 体			共 通			そ の 他			合 計
	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	他館購入	招待	免除	
3月	2,004	288	277	611	0	32	2,619	115	133	3,739	69	2,128	12,015
4月	2,805	204	532	392	6	3	3,118	98	221	4,429	167	1,332	13,307
5月	3,657	431	494	381	1	1	4,428	275	268	6,546	153	8,553	25,188

発行日

平成7年11月1日

発行

川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号

TEL 0492-22-5399